

エルンスト・H・カントーロヴィチ著  
小林 公訳

## 『皇帝フリードリヒ二世』

中央公論新社 二〇一一年・九刊  
A5 七七六頁 七六〇〇円

本書は、本書は一九二七年に刊行されたエルンスト・H・カントーロヴィチによる伝記 *Kaiser Friedrich der Zweite* の全訳である。原著は著者がドイツのロマン主義詩人シュテファン・ゲオルゲのサークルに属していた頃に書かれ、偉大な指導者を待望する当時のドイツの世相に於いて好評を博した。また、カントーロヴィチの著作の邦訳は『王の二つの身体』（小林公訳、平凡社、一九九二年／筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、二〇〇三年）と『祖国のために死ぬこと』（甚野尚志訳、みすず書房、一九九三年）が既に刊行されており、政治思想の研究として歴史学を超えて、他の学問領域においても高く評価されている。

本書の構成はフリードリヒ二世の誕生から死までを時系列順に追う形を取っており、彼を取り巻く一三世紀前半の地中海世界、およびドイツの状況に関する詳細な情報を与えてくれるが、本書は単に諸々の政治的行動を跡付けるに留まらない。勅令や書簡、年代記や詩などの多様な史料を駆使し、当時の人々の行動の理由や抱いていたイメージを読み取り、その内面を明らかにすることに努めている。これは本書全体を通じて見られる特徴であるが、

特に第五章においては伝記的叙述よりも、フリードリヒ二世の政策から浮かび上がる思想の分析の方が主となるに至っている。

その第五章「シチリアの専制君主」は十字軍から帰還した皇帝による、シチリア王国での強力な支配の形成について扱っており、勅法集成の編纂と官僚機構に焦点が当てられているが、その大部分を占めているのは、この皇帝においてのみ可能な形而上学的な国家論である。それは神と正義と皇帝の関係、「救済善」としての支配者と国家、国家と宗教の関係などに及ぶ壮大な国家論であり、フリードリヒ二世の国家は中世とルネサンスの国家の両方の側面を持つものとして位置づけられている。

また、原著が刊行された当時、ドイツの中世史学界は激しい反応を示したが、「訳者解説・あとがき」においてその批判と反論、および書評が紹介されている。ここで展開された議論は歴史学における「実証主義」のあり方をめぐるものであり、この議論が『アナル』の創刊と同時期になされたことも史学史上重要である。更に、その中で提起されている「何者として歴史を叙述すべきか」という問いは、現在の研究者も念頭に置かねばならない普遍的な問題であろう。

最後に本書が刊行されたことの意義について触れておく。フリードリヒ二世に関する研究はカントーロヴィチによる原著の刊行以来、デイヴィッド・アブラフィアによる批判を経て、新たな段階へと進んでいる。しかし日本においては一九世紀以来の「最初の近代人」としてのフリードリヒ二世像が一般的と行って良いであろう。本書の刊行はそのような一般的イメージと、現在の研究

の間に存在している溝を埋めるための、大きな一歩となりうる。本書に続き、より新しい研究が刊行されることが期待される。

(森本 光)